

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Follow-up of Diagonal Branch Bifurcation Lesions Treated with Left Anterior Descending Coronary Artery Stenting

(分岐部病変における左前下行枝へのシングルステント留置後の対角枝の検討)

循環器病学 (指導教授 増山 理)

氏 名 芳川 史嗣

【目的】

経皮的冠動脈形成術 (percutaneous coronary intervention:PCI) において、分岐部病変は最も難度の高い病変に分類される。分枝の救済が必要な時には、分枝へのステント治療や Kissing balloon technique (KBT) が行われるが、その有効性については確立されていない。これまでの研究では、様々な分枝をまとめて解析されてきた。しかし、それぞれの分枝は解剖学的・機能的に異なっており、それぞれの分岐部に対して的確な治療方針は異なるかもしれない。左前下行枝 (left anterior descending artery : LAD) は、3本の冠動脈のうち最も重要な血管であり、LAD へのシングルステント留置後の分枝への最適な対応を明らかにするために、私は LAD と対角枝との分岐部病変に対する長期成績を後ろ向きに解析した。

【方法】

当施設で 2006 年から 2012 年までの間に、LAD に問題なくステント留置され、対角枝 (D1 や D2) が jail された分岐部病変患者 51 名を後ろ向きに解析した。6-9 か月後の follow up の再狭窄の定義は、冠動脈造影検査で 50%以上の狭窄とした。KBT の効果の評価のため、狭窄が進行した人数を集計し、全体の人数で除することで増悪患者率を算出した。改善患者率に関しても同様に算出した。

【結果】

LAD へのステント留置後、D1 で 24 名、D2 で 11 名に狭窄を認めたが、6-9 か月後の follow up 時に完全閉塞した患者はいなかった。D1 に完全閉塞か 99%狭窄で造影遅延があった 12 名の患者のうち 8 名で、follow up 時に狭窄度は改善していた。Bare Metal Stent と Drug Eluting Stent では結果に差はなかった。さらに、分枝に狭窄病変があり KBT を行った群と狭窄病変があるが KBT を施行しなかった群では D1 と D2 共に、再狭窄率に有意差は見られなかった。

【結論】

今回の研究においては、分岐部に有意な狭窄があったとしても、分枝への対処として LAD にステント留置後の対角枝の KBT を含む追加の PCI は必ずしも必要ないことが示唆された。